

山部順治 (熊本大学) jiyamabe@kumamoto-u.ac.jp

キーワード：1. オリヤ語 (印欧語インド語派、インド東部) ; 2. 統語論、類型論、歴史言語学 ; 3. 類別詞、複数性

**要旨** 印欧語インド語派の現代諸語において、複数名詞に格標識が付いた形式は、両者の間に鼻音を含む (Masica 1991:230-235など)。すなわち、要素が次のように並ぶ — [名詞+N+格標識] (N=本発表で注目する鼻音)。その構造は、語源的には、名詞の複数斜格形に後置詞が格標識として後続したもので、複数斜格形は末尾に鼻音を含んでいた — (A) [[名詞+N 名詞の複数斜格形]+格標識]。現代諸語の多く (ヒンディー語など) においてもそうだ。以上を背景に、本発表は次を論じる。オリヤ語においては、要素の並び順は他の現代諸語と違わないが、構造が異なる。鼻音Nは、格標識の側に属しており、格標識が補部名詞と複数性に関して一致していることの現れである — (B) [名詞+[N+格標識 格標識の複数形]]。構造(B)を例証した後、それを既知の通言語的一般化と照合、また、通時的文脈に配置し、諸事実を説明する。

## 1 本発表は、オリヤ語における、とある鼻音に注目する

印欧語インド語派の現代諸語においては、複数名詞に格標識が付いた形式は、両者の間に鼻音を含む (Masica 1991:230-235など)。すなわち、表層的には、要素が次のように並ぶ — [名詞+N+格標識] (N=本発表で注目する鼻音)。例示として、(1)にはヒンディー語、(2)にはオリヤ語における、名詞の数・格による語形変化をあげる。本発表では、数種の格標識の代表として、目的格 (「～を」OBJ, オリヤ語 *-ko*, ヒンディー語 *-ku*) を取り扱う。鼻音Nは、(1)(2)の(d)の形式に見られ、n で囲って示してある — すなわち、ヒンディー語では母音の鼻音化 (ṅ で表記)、オリヤ語では[ŋ] (ṅ で表記)。

a.単数    b.単数+格    c.複数    d.複数+格    dの構造

- |     |        |       |               |                |              |  |                      |
|-----|--------|-------|---------------|----------------|--------------|--|----------------------|
| (1) | ヒンディー語 | 「男の子」 | <i>laDkaa</i> | <i>laDkeko</i> | <i>laDke</i> | <i>laDko</i> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">ko</span>  | (A)                  |
|     |        |       |               |                |              |  | [名詞+N 名詞の複数斜格形]+格標識  |
| (2) | オリヤ語   | 「子ども」 | <i>pilaa</i>  | <i>pilaaku</i> | <i>Pilaa</i> | <i>pilaa</i> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">ṅku</span> | (B)                  |
|     |        |       |               |                |              |  | [名詞+[N+格標識 格標識の複数形]] |

構造的には、鼻音Nは、その起源の段階から現代諸語においては、先行研究から知りうる限り、名詞の複数斜格形の一部である。(A)のようである。このことを背景にして、本発表は次の点を論じる。オリヤ語においては、要素の並び順は他の現代諸語と違わないが、構造が異なる。この言語では、対応する鼻音Nは、格標識の側に属しており、格標識が補部名詞 (つまり、前に来る名詞) と複数性に関して一致していることの現れである。(B)のようである。通時的には、オリヤ語の構造(B)は、構造(A)が異分析を被った結果である。

鼻音Nの話へ進む前に、オリヤ語に存在しない特徴を3点述べておく。(特にヒンディー語をご存じの方は留意されたい。) オリヤ語において、鼻音Nは、それらの存在しない特徴と関わる余地がないことを、ここで確認する。第1に、名詞のはだか格 (=名詞に格標識が後続しない場合) の場合では、(2)のa/cで見取れるように、単数/複数の違いでは形式が変化しない。したがって、名詞のはだか格の場合では、複

数を表す鼻音Nが出現するというものもない。(オリヤ語と異なり、ヒンディー語においては、(1)のa/cのように、単複による名詞の語形変化がある。)名詞の指示物の単複を明示するためには、(4)のように、随意的にあるいは文法的必要に応じて、名詞に類別詞を後接する。類別詞は、名詞の指示物の種類・個数を輪郭的に示すものである。

- (3) a. *pilaa-Ti* 「子ども(1人)」  
 kid-CLA 名詞+Ti: 単数の人・非情物  
 b. *pilaa -maane* 「子どもたち(複数人)」  
 kid-CLA 名詞+maane: 複数の人  
 c. *bahi-guDaa* 「本(複数個)」  
 book-CLA 名詞+guDaa: 複数の非情物・モノ扱いの人

第2に、属格の格標識が被修飾名詞(すなわち、後ろに来る名詞)の単複によって語形変化することは、ない。(4)では、*baabulaa-ra*「バブラ(ニックネーム)の」の形式は子どもの人数に関わらず不変である。(これに対し、ヒンディー語においては、(5)の太字下線部のような語形変化が生じる。)

		a.単数	b.複数
(4)	オリヤ語 「バブラの子ども」	<i>baabulaa-ra pilaa (-Ti)</i> Babula-GEN kid CLA	<i>baabulaa-ra pilaa (-maane)</i> Babula-GEN kid CLA
(5)	ヒンディー語 「バブラの息子」	<i>baabulaa <u>kaa</u> beTaa</i> Babula GEN.SG son.SG	<i>baabulaa <u>ke</u> beTe</i> Babula GEN.PL son.PL

第3に、文法的範疇として性の区別(男性/女性など)は存在しない。したがって、鼻音Nの(不)出現が性によって影響されるということもない。

以下では、鼻音Nとその現れる構造(B)をめぐって、次のように議論を展開する。2節では、鼻音Nの生起条件を詳述する。3節では、構造(B)を例証すべく、名詞の等位接続構造を取り上げる。4節では、構造(B)を通言語的一般化と通時的コンテキストから考察する。5節で隣接する文法領域を素描する。

## 2 鼻音Nの生起条件

以上で見た例のように、鼻音Nは、名詞が複数人を指しているときに現れ、その点では複数性の表現である。しかし、さらに詳しく観察すると、鼻音Nの出現と、意味的な複数個指示は、範囲が異なる。大きく重なる一方で、様々な方向へズレている。以下に、その様子を、名詞の指示物の種類A~Dに分けて示す。

A. 人の場合。鼻音Nは、(6a)のように、人数が単数なら現れず、(6b,c)のように、複数なら現れる。ただし、複数人数の場合、鼻音Nの出現は随意的である。

- (6) a. *jaN-e pilaa* { -ku | \*nku } 「1人の子どもを」  
 cla-one kid OBJ N-OBJ 数詞+jaNa: 単数・複数の人  
 b. *dui jaNa pilaa* { -ku | nku } 「2人の子どもを」  
 two CLA kid OBJ N-OBJ  
 c. *dui Ti pilaa* { -ku | nku } 「2人の子どもを」  
 two CLA kid OBJ N-OBJ 数詞+Ti: 複数の人・非情物

なお、場合A（複数人の場合）のうち、鼻音Nの出現が（(6b,c)のように随意的でなく）義務的である事例も観察される。しかし、そうなる条件についてまだ調査が不十分にできていない。

B. 非情物の場合。鼻音Nは現れない。個数が複数個であっても現れない。(6c)と(7)は、[数詞+類別詞]が同一（*dui Ti 'twoCLA'*）で、相違は名詞が「子ども」か「本」か、というミニマルペアある。

- (7) *dui Ti bahi* {*-ku* | \**-nku*} 「2冊の本を」  
two CLA book OBJ N-OBJ

場合A/場合Bの間の相違は、名詞の語形変化に関する性質に起因する（つまり形態的な理由による）のではなく、名詞句の指示対象の種類に起因する（つまり意味ないし統語的な理由による）。名詞句内で[数詞+類別詞]と[名詞]の語順を入れ替えて、(8)のように同一の表現（*dui Ti 'twoCLA'*）を格標識の直前に来るようにしても、やはり、(6c)対(7)で見られた差は依然として観察される。

- (8) a. *pilaa dui Ti* {*-ku* | *-nku*} 「子ども2人を」 <(6c)  
kid two CLA OBJ N-OBJ  
b. *bahi dui Ti* {*-ku* | \**-nku*} 「本2冊を」 <(7)  
kid two CLA OBJ N-OBJ

C. 尊敬対象の人の場合。鼻音Nは、義務的に現れる。指示対象が1人であっても必ず現れる。

- (9) *saar | mo baapaa* {*\*-ku* | *-nku*} 「先生|私の父を」  
sir my father OBJ N-OBJ

場合A/場合Cの間の相違もまた、名詞の形態的特質によるものではなく、名詞句に関する意味のないし統語的理由によるものである。(10)のa,bの対比に示されるように、語彙項目としては同一の組み合わせ（*tini jaNa (jaaka)*「3人(とも)」）であっても、意味的にその指示対象が複数人数の普通の人（場合A）であれば鼻音Nの出現は随意的であり、尊敬対象（場合C）であれば義務的である。

- (10) a. 3人の乞食がそこに座っていた。  
*aame se tini jana (jaaka)* {*-ku* | *-nku*} *baahaara kar-i de-l-u.*  
we.NOM that three CLA whole OBJ N-OBJ outside do-CP give-PAST-1PL  
我々はその3人(とも)を追い出した。  
b. 3人の先生が今日いらっしゃっていた。  
*aame se tini jana (jaaka)* {*\*-ku* | *-nku*} *ghara-ku ne-iki jaa-uch-u.*  
we.NOM that three CLA whole OBJ N-OBJ house-OBJ take-CP go-PROG-1PL  
我々はその3人(とも)を自宅へお連れするところだ。

D. 語彙的例外。複数人数を表す語のうち、特定の数点については、鼻音N出現の有りあるいは無しが語形変化として決まっている（つまり、形態的理由による）。個々の語彙項目の特質である。例えば、代名詞*aame*「私たち」は、意味的には複数人の人を指すが、鼻音Nを伴わない。また、類別詞*maane*「たち」は、人一般の複数人について使用されるが、鼻音Nの出現は随意的であるにとどまらず、義務的である。このような例外的な語は“文法的な”語である。

- (11) *aama* {*-ku* | \**-nku*} 「我々を」  
us OBJ N-OBJ

- (12) *pilaa maana* { \*-ku | -nku } 「子どもたちを」  
 kid CLA OBJ N-OBJ

これらの語彙項目が絡む場合には、鼻音Nの(不)出現は、語彙項目の形態的特質によっているので、格標識に隣接する表現によって決定される。(13)のように、(11)の*aame*「私たち」に(12)の類別詞*maane*が後続したときは、後者が結果を決め、N音の出現は(12)と同じく義務的になる。

- (13) *aama maana* { \*-ku | -nku } 「我々たちを」  
 us CLA OBJ N-OBJ

本発表で取り扱う例は、主に、人の場合(場合A)、次に、尊敬対象の人の場合(場合C)に該当する。

### 3 鼻音Nは、名詞でなく格標識の側に属す

オリア語の構造は(B) (2)の最右列を参照) のようであり、それによれば鼻音Nは名詞でなく格標識の側に属す。このことは、名詞の等位接続構造を利用して示すことができる。例(14b)では、格標識が補部として取っている等位構造「バピとグヌ(いずれもニックネーム)」全体が複数人数を指すことに呼応して、鼻音Nが生じている。もし、構造が(A)のようであったなら、鼻音Nの現れる理由が想定できない。鼻音は格標識の直前に位置する名詞の一部をなすことから、その名詞(例(14a,b)では名詞「グヌ」)じたいの特徴(単数)しか表せなかったところだ。なお、(14a)のように、「グヌ」一人の場合は、鼻音Nは現れない。

- (14) a. *gunu* { -ku | \*-nku } 「グヌを」  
 Gunu OBJ N-OBJ
- b. *baapi aau gunu* { -ku | -nku } 「[バピとグヌ]を」  
 Bapi and Gunu OBJ N-OBJ

鼻音が名詞でなく格標識の側に属していることを示すもう一つの兆候は、(14a)の反対にあたる。すなわち、等位接続構造全体と格標識の間以外の箇所には、N音が現れない。例えば、(15)では、等位構造の1番目の名詞が複数個を指示しているが、この近辺にはN音が現れない。

- (15) *pua-* { - $\phi$  | \*-n } *aau jhia* -nku 「[男の子(複数人)と女の子(複数人)]を」  
 boy N and girl N-OBJ

なお、ヒンディー語における事実は、上述の2点に関してはオリア語と逆になる。単数名詞の等位接続構造においては(どの箇所にも)N音((1d)の□)は現れず、複数名詞の等位構造においては(2番目の名詞だけでなく)第1番目の名詞のところにN音が現れる。この状況は、この言語における構造(A)の帰結である。

構造(B)は、等位接続構造に関する事実のほか、2節で見た次の事実①,②によっても支持される。①(8)のa対bの対比－鼻音Nの生起可能性は、格標識に隣接する語彙項目(abのいずれでも、*dui Ti* 'twoCLA')によって決定されるのでなく、格標識が補部として取る名詞句全体の意味(人であるか非情物であるか)によって決定されている。②(10)のa対bについて見られる対比は、語彙項目(いずれでも*tini jaNa* (*jaaka*)「3人とも」)の特質によってではなく、名詞句が文脈から獲得する意味(当該の談話における指示対象)によって決定されている。

#### 4 通言語的・通時的な俯瞰

通言語的な一般化として、名詞句における数の文法的標示に関して次が知られている — 名詞の複数形と、義務的な数類別詞は、相補分布をなす。(Sanches and Slobin 1973, ウェブサイト *Rara & Universals Archive*, Universal 533。この一般化の理論的説明は、Chierchia 1998, Borer 2005: ch.4など)。( *Rara & Universals Archive*, Universal 533では、次のように定式化されている — もし、ある言語において、数類別詞 *numeral classifiers* が主要な数量標示の方法として存在するならば、その言語においては、複数標示は義務的ではない。)

相補分布をなす2種の表現のどちらを持つかによって、諸言語は2つに分かれる。例えば、英語は前者(-s)のみを持ち、日本語は後者(「～個/冊の」などの助数詞)のみを持つ。インド語派の諸言語のうちでは、ヒンディー語など現代諸語の多くは前者のみ、ベンガル語などインド東部の言語は後者のみだ。

この一般化が成り立つ仕組みの説明として、以下では、(16)の発想(Borer (2005)などによる)を採用する。

- (16) ① 名詞の複数屈折と数類別詞は、統語構造上で同じ位置を占める = 同一の位置の具現である。  
 ② ①の帰結として、両者は同一文中に現れることはない。

以下では、(16)の考えを参照しながら、オリヤ語の諸事実を理論的・通時的に位置づける。

オリヤ語では、(17)のように、義務的な数類別詞がある。人数・個数の標示には類別詞が必要である。

- (17) a. *dui \*(jaNa) pilaa* 「2人の子ども」 c. *dui \*(Taa) bahi* 「2冊の本」  
 two CLA kid two CLA book  
 b. { *jaN-e* | *\*eka* } *pilaa* 「1人の子ども」 d. *egaara \*(Taa) beLe* 「11時」  
 CLA-one one kid eleven CLA time

ところで、鼻音Nは、複数性の標示である。もし構造(A)のように、鼻音Nが名詞に属す(したがって名詞の複数形の一部をなす)とすれば、例(6,b,c),(8a)の名詞句は、数の文法的標示を両方のしかたで行っていることになり、(16)の仕組みに抵触していたところである。しかし、実際の構造は構造(B)であり、そこでは鼻音Nは格標識に属するおかげで、(16)の仕組みの適用による排除を逃れている。

(16)の仕組みは、インド語派における通時的变化のありかたを規定している、と捉えることができる。同語派では、元来、名詞の複数形があり、義務的な数類別詞はなかった。そこに、インド東部の諸言語で、数類別詞の義務的使用が導入された。その契機としては、東南アジアへ連なる異系統の諸言語との接触が指摘されている(Masica 1976など)。そうすると、従来の鼻音Nによる名詞複数形は、(16)の仕組みによって廃止を促されることになる。2種類の方策があった。一つは、鼻音Nを消失させることで、名詞の屈折的複数を廃止する(ベンガル語など)。もう一つは、鼻音Nの性格を、名詞の屈折的要素から、その外にある格標識の屈折的要素へと、統語的位置に関して変更する(オリヤ語)。

(16)の仕組みは、上述の言い方では、オリヤ語の鼻音Nに影響を及ぼさない。しかし、オリヤ語でも一定程度の抑制効果を及ぼしていると捉えられる。格標識まで含んだ名詞句における複数標示は、随意的であるに止められている。この抑制効果は次の①,②の点から見て取れる。①(格標識まで含んだ)名詞句における数一致は、随意的にとどまっている((6,b,c),(14b)など)のに対し、節において動詞が主語と数一致を示すことは、義務的である(17)。

- (17) *saar eban taanka chuaa aasib-* { *\*-a* | *-e* }  
 sir and his baby come.FUT- 3GS 3PL  
 先生と子供(1人)が来るだろう。

② 注目の鼻音は、尊敬によって引き起こされている場合は必ず一致が生じる(9)のに対し、複数性によって引き起こされている場合は随意的であるにとどまっている(6b,c)。

オリヤ語とヒンディー語の対比では、鼻音Nの生起条件が次のように異なる。オリヤ語では、(上述のように) ①複数の場合には鼻音の生起は随意的であり、②尊敬の名詞の場合には義務的である。これに対して、ヒンディー語では、①複数の場合は鼻音N ((1d)の□) の生起は義務的であり、②尊敬の名詞の場合には鼻音は生じない(ただし、代名詞の場合には生じる) (S.K. Bhatt 2012)。

②に関する言語間の相違は、通時的に、オリヤ語において、名詞における鼻音Nが尊敬を表すようになるという用法拡張が起こった結果である。新しい構造(B)はこの意味拡張の生起を手助けしたと考えられる。複数性は、名詞句の指示物に内在する性質であるのに対し、尊敬は、指示物名詞句が文脈中で帯びる性質だということでは、後者は前者よりも“外側”に位置する意味である。鼻音Nは、構造(B)においては統語的構造上で名詞句の外に位置するようになったが、そのような位置は尊敬の意味に呼応する。

かつての構造(A)において、鼻音Nは名詞の側に属していた、という記憶は、オリヤ語では次の事実に残している。格標識が等位接続の名詞句を取る場合、格標識がそのような名詞句全体と一致することは、(14b)のように可能である。しかし、一概に可能というわけではなく、例えば、(18)では、それが不可能で、格標識は最後の名詞(つまり、昔、鼻音Nが一部であった名詞)と一致する(詳細は不明)。この状況は、(17)のように、節における主語-動詞の一致と対照的である。そこでは、ほぼ例外なく、動詞が等位接続の名詞句全体と一致する。

- (18) *mu~ saar eban taanka chuaa* { *-ku* | *\*-nku* } *Daak-ich-i*.  
 I.NOM sir and his baby OBJ N-OBJ call-PERF-1SG  
 私は先生と子供(1人)を招待した。

(16)の仕組みは、オリヤ語においては、(上述のように) 鼻音Nを排除しない。しかし、他の場面で効力を発揮する。すなわち、(19)のように、数詞(1、2など)があると名詞の後ろに類別詞を後続できない。

- (19) a. *dui jaNa pilaa (\*maane)* 「逐語訳：2人の子どもたち」  
 two CLA kid CLA  
 b. *jaN-e pilaa (\*Ti)* 「1人の子ども」  
 CLA-one kid CLA  
 c. *Dui-Ti bahi (\*guDaa)* 「2冊の本」  
 two-CLA book CLA

理由は次のとおりである。数詞じたいが類別詞を要求するので、さらに名詞の後ろに類別詞があると、名詞句内に2つ類別詞が含まれることになる。ところで、数詞に付く類別詞と、名詞に付く類別詞は、統語構造上で同じ位置の具現である、と考えられる(ベンガル語について、T. Bhattacharya 2001)。すなわち、(19)で不適格な例は、(16)の①と同等の状況になっている。類別詞のうちには、数詞のみに付くもの(いわば助数詞)、名詞のみに付くもの、両方に付くものがある。異なる類別詞であっても、2個同時には出現できない。さらに、類別詞による数標識が複数でなく単数のそれであっても、2個同時に出現できない。

## 5 隣接領域

以上では、格標識の代表として目的格のそれを取り上げた。オリヤ語においては、他の格標識について

も、複数人あるいは尊敬対象の名詞と格標識の間で、鼻音Nは生起する。名詞+格標識の他には、複数人あるいは尊敬対象の名詞と被修飾名詞の間で、鼻音Nは生起する—この場合、見かけ上、名詞の属格語尾 $-ra$ を省略した形になる。しかし、目的格の場合と対比すると、(非)生起の分布はきれいに並行的に広がっているわけではない(詳細についてはまだ調査が不十分である。)下に、(20)属格において、(21)奪格において、(23)名詞+名詞の場合において、鼻音Nの有る/無しで対比をなす例を挙げる。

- (20) a. *baapi aau maani* {  $-nka$  } *caari barsa taLe bahu aaDamba-re baahaaghara he-ith-il-aa*.  
 Bapi and Mani N-GEN four year below big ostentation-LOC marriage happen-PERF-PAST-3SG  
 [バピとマニ]は、4年前派手に結婚式を挙げた。
- b. *baapi aau maani* {  $-ra / *-nka$  } *caari barsa taLe bahu aaDamba-re baahaaghara he-ith-il-aa*.  
 Bapi and Mani N-GEN four year below big ostentation-LOC marriage happen-PERF-PAST-3SG  
 バピは、4年前派手に結婚式を挙げた。
- (21) a. *maNTu aau gunu* {  $-nka-Thu$  } 「[モントウとグヌ]から」  
 Montu and Gunu N-ABL
- b. *maNTu* {  $-Thu / *-nka-Thu$  } 「モントウから」  
 Montu ABL N-ABL
- (22) a. *ei-Taa saar* {  $-nka$  } *saarT*.  
 this-CLA sir N shirt  
 これは先生(尊敬対象)のシャツだ。
- b. *ei-Taa baabulaa* {  $\phi / *-nka$  } *saarT*.  
 this-CLA Babula N shirt  
 これはバブラ(普通の人)のシャツだ。

## 参照文献

- Bhatt, Sunil Kumar (2012) Honorifics in Hindi: a morphological, semantic and pragmatic analyses, *Linguistica Brunensia* 60, 49-60.
- Bhattacharya Tanmoy (2001) Numeral/quantifier-classifier as a complex head. Norbert Corver and Henk van Riemsdijk, eds., *Semi-lexical categories: the function of content words and the content of function words*, 191-222. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton Mouton de Gruyter.
- Borer, Hagit (2005) *Structuring sense, volume 1: In name only*. Oxford: Oxford University Press.
- Chierchia, Gennaro (1998) Reference to kinds across languages. *Natural Language Semantics* 6, 339-405.
- Masica, Colin P. (1976) *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: Chicago University Press.
- Masica, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sanches, Mary and Linda Slobin (1973) Numeral classifiers and plural marking: An implicational universal. *Working Papers on Language Universals* 11, 1-22. Stanford, CA: Language Universals Project, Committee on Linguistics, Stanford University.
- ウェブサイト: *Rara & Universals Archive, Das grammatische Raritätenkabinett & The Universals Archive*.  
<https://typo.uni-konstanz.de/rara/>

略号 ABL = ablative, CLA = classifier, FUT = future, GEN = genitive, NOM = nominative, OBJ = objective, PAST = past, PERF = perfect, PL = plural, SG = singular, 1/2/3 = 1st/2nd/3rd person.

オリヤ語の発音  $a[\text{ɔ}]$ ,  $aa[a]$ ,  $D,L,T$ =retroflex,  $\sim$ =nasalization.